

株式会社マスオカ



プレス金型、アルミや樹脂の押し出し金型など、クライアントの要望にフレキシブルに対応。

TOP MESSAGE

海外進出においては、「何を目的として進出するか」を明確にしておく必要があります。当社の場合においては、コスト削減を目的としたベトナム進出となりましたが、外部環境が大きく変化している今、現地の生きた情報収集が必要だと感じます。現地日系企業に足を運ぶのも1つの方法だと思います。

また、人材の確保・育成も重要です。当社も現地マネージャークラスのスタッフ育成に取り組んでいますが、言葉の壁を意識した仕掛けが必要だと実感しています。将来的には現地スタッフ同士で、当社の知識やノウハウの技能伝承が成立することを目指して参ります。

会社設立・1987年12月
社長・増岡 一郎
資本金・3,000万円
従業員数・159人

〒939-0142
富山県高岡市福岡町土屋705
TEL.0766-64-5667
FAX.0766-64-6201
<http://www.ms-masuoka.co.jp/>



- 1 金型の設計、製造、各種専用機械ラインの設計から設置までを手掛けてきた。
- 2 マシニング、旋盤加工がメインとなる第一・第二工場、自動車部品専門の第三工場がある。
- 3 会社の礎を築いてきた社長・増岡一郎氏。「人を育てることが楽しみのひとつ」と語る。

合資から独資の現地拠点設立へ 成果の秘訣はアフターフォロー

各種金型の設計・製作を手掛ける『株式会社マスオカ』。プレス金型、アルミ押出金型、樹脂押出金型など多くの製品を扱っている。1959年に個人

創業し、1987年、社名変更により同社の設立に至った。半世紀に渡り培った金型設計・製作技術を武器に今も成長を続けている企業である。

1990年代後半、デフレ経済へ突入し製造業界においては、企業のコスト削減努力が迫られていた。そうした背景の中、当社もコスト削減を視野にいたれた海外展開を検討し始め、中国もしくはベトナムが候補として挙がったという。同年8月、ベトナムへの現地視察に赴いた際、ベトナム人がCADを使用し働く姿を目にし、その予想外なスキルの高さに驚いたという。そして2002年、日本のある企業から合同出資でのベトナム法人設立の誘いを受け、合弁企業を設立した。当時から設計と金型製作を手掛けていたが、経営方針の相違もあり、譲渡した。そして一度は身を引いたが、2009年

5月、今度は100%独資での現地法人『マスオカベトナム』を設立した。競争力強化を図るため、日本で受注した案件を、ベトナム国内で製造することでコストダウンさせながら、完成品を日本へ輸出することを狙った。そして実際におよそ3割のコスト削減が実現した。

上記のコストメリットの他に、これまで日本では取引のなかった大手クライアントから声をかけられることが増えたという。現地ベトナム国内の競合他社は、金型製品の製造に終始している先が多い中、当社は高精度製品の提供と合わせてメンテナンスやきめ細やかなアフターフォローを行っている。ベトナムは日本と違いサプライヤーが少ないこともあり、このようなサービスは付加価値の高いものとされ、現地日系企業からの高い評価を得ることができた。

【知財ポイント】

一流の技術者を育成する社内の仕組み

【波及効果】

日本流ものづくりを伝承するベトナムでの技術指導



5 4



4 左からトゥアンさん、グエンさん。ベトナム出身の技能実習生として日々ものづくりを学ぶ。

5 納品前の最終検査は入念に行う。3次元測定器を用い、品質保証体制を社内で確立している。

6 マシニング・旋盤加工の複合機を扱う本社スタッフ。精密機器を扱うため、日々細やかな配慮が欠かせない。

7 各クライアントによって製造するのは大小様々。品質向上に向け、日々勉強している。



7



6

日本人とベトナム人の
違いを実感
互いの成長を実現するには

当社では30年以上に渡り新卒採用し続けている。代表・増岡一郎氏は、「採用は社長の大きなミッションである」と話す。採用する人材のほとんどは理系学部出身者だ。

日本国内では先輩社員が若手社員へ「技能を継承する文化」が形成されているがベトナムでは希薄であるという。成長意欲の高いベトナム人たちには、今まで学んだ知識や経験、ノウハウを「自分の技術」とし、他者へ教えるという意識がない。

このため、現在では隔月ペースで日本人技術者を現地に出向させ、指導を



社内転勤制度を活用して本社で技術指導を受けるベトナム人スタッフたち。

進めている。日本では、入社後の技能資格取得の積極的な奨励や技術者間の活発なコミュニケーションにより、金型の構造や金型製造に関わる技術を身につける事ができ、1人1人の技術力は高い。ベトナム現地のスタッフは、その高い「技術力」を目の当たりにし、尊敬のまなざしで積極的に教えを受けているという。



ベトナムでの技術指導を経て、自らも復習することができ、さらなる技術力向上が見込める。

一方、「生産性向上」は日本では既に根付いている考え方はあるが、ベトナムではそのような慣習がない。各作業工程の中で、現場の「ムダ」を見つけ、改善するための知恵を絞ることが求められる。そのきっかけとして、標準作業をマニュアルに落とし込み、誰もが作業できる仕組みづくりを進め、技能伝承、生産性向上という考え方を浸透させることを目指している。